

田舎暮らし ～二地域居住の勧めとJCCAへの期待～

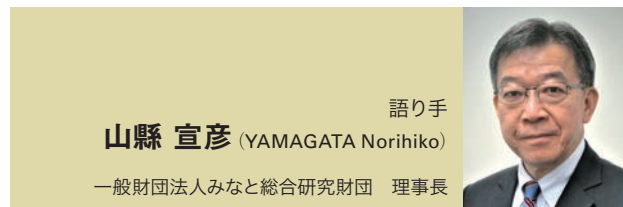
私は、広島県の中山間地の出身である。子供の頃の昭和30年代は、それでも活気にあふれた典型的な田舎町であった。しかしその後、ご多分に漏れず、過疎化が急速に進み、今は何とも哀れな状況となってしまっている。

運輸省（現国土交通省）に奉職し、全国を転勤していく中で、常に荒廃する故郷のことを気にしつつも、何もできないことを辛く思うこともあった。6年前に退職したのを機に、現在は週末を使って、東京の自宅と広島の実家との間を毎月2回のペースで航空機を利用して往復する日々を送っている。広島空港の月極駐車場に置いた自家用車に乗り、世羅台道を1時間程北に走る。親の居る介護施設へ立寄った後、日用品を購入して、プチ「ポツンと一軒家」に辿り着くという行動パターンである。

この田舎で暮らせるという機会を使い、試行錯誤で野菜作りに挑戦しつつ、家の片づけも精力的に行っている。明治期の、いわゆる古民家なので、長期に保存できるよう、なるべく原型に戻すことを意識しながら、徐々に実家の改修を行っている。また、年に数回、友人を招き、屋外パーティや野外体験をしてもらっている。中には、草刈りにはまり、毎年訪れる友人もいる。

一方、故郷の活性化を応援するために、東京地区での地元出身者の会（応援の会）の活動にも参画し、東京での人的ネットワークを活用した支援活動も行っている。会の活動は、地元が誇る神楽の東京公演の支援、地元産品の市場化の支援、企業誘致等々である。私は、地元出身の起業家が進める自社の社員研修や人材研修施設整備の応援を行っている。ダム湖に面した山林に施設を設け、自然の中での協働作業をしていくことで社内のコミュニケーションの向上を図ろうとするものである。

実は、東の研修拠点を山梨の川口湖



語り手
山縣 宣彦 (YAMAGATA Norihiko)
一般財団法人みなと総合研究財団 理事長

1954年生まれ。京都大学工学部土木工学科卒。1977年4月、運輸省（現国土交通省）入省。北九州市港湾局長（現港湾空港局長）、国土交通省大臣官房技術参事官（港湾）、国土交通省港湾局長を歴任。退官後は三井住友海上火災保険（株）顧問、一般財団法人みなと総合研究財団理事長。

周辺に既に設けており、今度は西の拠点を故郷広島に設けたいという計画である。これは、森の持つ様々な機能を問題解決に活用するという、国土交通省の推奨するグリーンインフラの実践といってもよいプロジェクトである。今後は、業態の異なる複数の企業の研修施設を誘致し、企業間のコラボ効果も期待したい。何とか成功するよう応援したいと思っている。

そうこうするうちに、今回のコロナ災禍である。医療先進国の日本では、何とか大事には至らずに済んでいる



写真1 田舎で在宅勤務

が、第二波、第三波への備えも必要と言われており、今後はコロナとの共生というライフスタイルが求められている。コロナには、三密を避けることが必要であるが、ある知事も言及していたが、これからは四密対策が欠かせない。四つ目の密は「過密」である。三密対策だけでは限度がある。「過密」を解消することが、本源的解決策だと思える。

従前より、首都直下型地震等の大震災、大規模台風の影響等々の切迫性から東京一極集中の弊害が叫ばれて久しい。今までは掛け声倒れの様相を呈していたものが、ここきて在宅勤務が必然となり、世の中の仕事や生活スタイルが、今度こそ激変しようとしている。我が国を覆う過疎・過密という社会問題に対して、「適疎」というコンセプトが益々重要になってきているようだ。

そこで、一つの方策として、二地域居住という生活スタイルも一つの解決策となってくるように思える。今や田舎であってもネットを通じて世界に繋がっている。情報収集や交流できる環境は加速度的に改善している。仕事の形態が、勤務時間で管理されるのではなく、職務内容を明確にして仕事をする、いわゆるジョブ型労働であるなら、まったく制約はなくなる。建設コンサルタントの仕事には大変親和性が高いと言えるのではないだろうか。仕事の合間に、畑作業をしつつ、無心になることもできる。本社のサーバーとの接続におけるセキュリティ確保など技術的な課題さえ解決できれば、ネット会議等も活用しながら、大抵の作業はできるように思える。今年から開始される5Gの世界になれば尚更である。自民党には、地方や郊外への移住を促進するための基盤として、デジタル田園都市構想というアイデアもあると聞く。もちろん、チームワークで仕事をする必要があり、仲間とのコミュニケーションを図るため、あるいはクライアントとの円滑な意思の疎通を図るため、フェイス・ツー・フェイスのコミュニケーションは引き続き確保しなくてはいいけない。

私は幸い、東京の自宅と広島の田舎の家があり、両方を住まいとすることで、ゆくゆくは、夏は田舎、冬は東京という渡り鳥生活を試みようと思っている。しかし、田舎の過疎化、田畑や森林の荒廃等深刻化する田舎



写真2 畑仕事で気分転換

の問題がとても気になって仕方がない。「山が荒れれば、海も荒れる」と言われる。中山間地の問題は、国土の強靱化にも通ずる問題でもある。こうした現実、危機感を持つ人間として、是非JCCA（建設コンサルタント協会）会員各社の知恵と力を貸してもらいたいものである。

地方の行政の現場では、人員が減る中ではあるが、日々奮闘している。しかし、日々の業務に追われ、ゆっくりと自分のフィールドを見る時間もないのが現状である。また、自分の行政域には関心を持つものの、近接する区域との関係は必ずしも良好とは言えないケースもある。地域の活性化の施策は、産業振興、交通維持、広域防災等々、地方行政単体で考えるより県を跨いで考える方が効果的なこともある。その意味で、地域創生に関する情報と知恵も持ち、俯瞰的に地域の問題の所在と解決策を提案できるJCCAの会員各社に期待するところ大である。その際、二地域居住あるいは田舎での在宅勤務等で仕事をしつつ、目の前の田舎の現実を直視して、田舎を活性化させるための新たな提案や夢のあるビジョンを、住人である自分自身の問題として、地方行政やコミュニティに対して訴え、行動してもらいたいと考えている。

アフターコロナで田舎が活性化する。それを先導するのが、JCCAであって欲しいとの思いで、この拙稿を書いた次第である。